

魚沼^{はっかい}, 八海両自由大学の成立と経過

——大正期自由大学運動研究への試み——

森 山 茂 樹

1. 自由大学運動の概観

1919（大正8）年，長野県小県郡神川村に，哲学の研究会が誕生した。会員は，農村青年と教員が主であった。翌大正9年の9月，この会は講師に土田杏村を迎えて，哲学の講習会を開いた。30数名の参加者があった。中心人物は，蚕種製造業を営む金井正，山越脩蔵と，塩川村小学校教員金井栄の3人であった。さらに大正10年の2月には，同じ土田杏村を講師として第2回の哲学講習会が上田市の高等女学校を会場にして開催された。

この講習会は，参加者から1人3円の聴講料を徴収し，これをもって運営費にあてるという方法をとった。この方式は，1回かぎりの講演会とはちがひ，会の連続的開催を可能にすると同時に，哲学だけでなく，文学や法律という他の分野の学問をも，この講習会のなかに位置づけて行ける可能性をもったものであった。

参加者から聴講料を徴収し，それによって学習会を連続的に，総合的に組織するという構想は，上田地方の文化運動に深い関心を寄せていた土田杏村の肩入れによって，急速に具体化することとなり，やがて自由大学として現実のものとなる。

ところで，長野県にはこのころ，信濃黎明会というものがあつた。1920（大正9）年9月，小県郡連合青年会の講演会に集まった青年たちのうち，官製の青年会にあきたらない者たちが，有志をもって社会民主化運動の団体を作ろう

ということで発足したのが、信濃黎明会である。会の綱領として次の点を掲げていた。

- 1 世界ノ文化的大勢ナル人類解放ノ新気運ニ協調シ人類ノ自己実現ヲ尊重ス。
- 2 吾人青年ハ真理ト正義ノ使徒タルコトヲ確信シ現代日本ノ正当ナル改造運動ニ参与ス。

ここに示されている、「現代日本ノ正当ナル改造運動」というものが、具体的にいかなるものなのか明らかではないが、その後の信黎の動きをみるかぎり、それは、普通選挙運動の推進や軍備縮小運動、地方選挙への参加という政治運動であった。

信濃黎明会は、1925（大正14）年秋、信濃革正党という政治団体に発展的解消をとげたことからわかるように、時とともに政治への傾斜を深めていった。

信黎の活動が政治的な色彩をますます強めていくなかにおいて、発足当時の修養部長山越脩蔵は、社会改造の運動に携るにはなによりもまず自己の完成が先決だとして、自からもその一員として出発した神川村青年たちの哲学研究会に、一方においてさらに深くかかわっていった。

信黎の修養部長である山越が、同時に哲学研究会の中心的人物であったため、1921（大正10）年10月哲学研究会を母胎として発足した信濃自由大学は、信黎の修養部的性格をも持っていた。しかし、やがて自由大学は独自の教育機関として自立していった。

土田杏村、山越脩蔵、信濃黎明会宣伝部長猪坂直一等を中心にして誕生した信濃自由大学は、政治活動を主とする運動団体ではなく、青年の学習団体であった。政治や社会運動に関心をもつものの集団であった信濃黎明会の会員から、自由大学への参加者が少なかった事実によっても、当時自由大学のもっていた性格をうかがい知ることができる。

こうして農村青年の哲学研究会を母胎とし、一方、政治運動団体の修養部としての性格をも合わせもちながら出発した信濃自由大学は、しかしその成立経過から知られるように、その後は政治活動とは離れた地点での教育学習活動機関としての性格を急速に強めていった。

政治活動よりも教育学習活動の重視、という自由大学の方針は、土田杏村の執筆した信濃自由大学設立趣意書のなかに次のようにみえる。

「我々の社会にあってもデモクラシイの原理の適用せられなければならぬものは甚だ多いが、併し我々のあらゆる活動の基礎は自己教育にあるとすれば、我々は先づ第一に教育に於てのデモクラシイを要求しなければならない。財産や政治発言権やの上に於てのデモクラシイも、其の基礎に教養のデモクラシイを置かないでは何の意味をも為さない。然るに我々の社会の教育にあっては、其れに参与する機会を決して平等に附与せられていない。我々は学校教育が大学を以て終る其れをさへ甚だ不満足に思っていることは前述の通りだが、其の大学の教育さへ平等にすべての人間に開放されては居ない。大学教育を受ける為には、其の精神的能力以外に、莫大なる経済的資力が必要とせられる。その資力の無いものは此の教育を受けることが出来ず、此の教育を受けないから社会にあつての地位も自づから高められることが出来ない。すべての社会的不平等は教育の不平等を根本の原因として運命的に決定せられ、其の結果の派生するところ止まることを知らないのである。

其れ故に我々は、最も高い程度の教育を受ける機会を何人にも与えよと要求する。しかも其の最も高い程度の教育は、労働しつつ学ぶところの学校に於てでなければならないとする。我々は此の如き学校を、温情により上より授与せられようとは望まない。我々の眼目とするところは、究極に於ては人格自律の精神であり、外形的の結果では無い。其れ故に我々は大学拡張教育という様な、温情主義的の教育だけで満足するものでは無い。我々は教育の自律を計らなければならない。結局は我々の学校は、すべての点に於て我々

自身によって組織せられ，支持せられる。其れは終生的の学校である。労働しつつ学ぶ学校である。」

この趣意書にみられるように，「すべての社会的不平等は教育の不平等を根本の原因として運命的に決定せられ」という見解に立つかぎり，自由大学が政治活動よりも教育学習活動に力点を置いたのは当然のことであつたろう。

しかしながら，ここに，「社会的政治的運動との断絶は，当時の教育運動が自らのいのちを保持するために払わねばならないやむをえない代償には相違なかったが，多くのばあいそれは教育運動の成果をスポイルしてしまうことになった。真実の人格の向上——人間精神の変革——が，社会と自然の変革の実践のなかで実現するものである以上，実践によって検証されることのないままの英知が教養にとどまってしまうのは当然であらう。」「教養主義とは，つまるところ理論と実践の分離であり，社会を変革することと人間を変革することとの不統一としてあらわれる。」と批判される基盤があつた。⁽¹⁾

ところで，杏村の考えていた「教育」とはいかなるものであつたろうか。彼は次のように述べる。

「我々が特に資本主義，社会主義と決定せず，ただ真の人間の進むべき道途を追求する教育を理想として教育することは，此れ亦少しも否定せらるべきものではない。私は今資本主義と社会主義との何れが真なるやを断定しようとは思はない，かかる判断の真を追求し，虚偽を拒否する人格的態度を得るように，相互的に教育しようと欲するのみである。」⁽²⁾

信濃自由大学（のちに上田自由大学と改称）に続いて大正12年12月には下伊那に信南自由大学（のちに伊那自由大学と改称）が設立され，さらに大正14年1月松本に松本自由大学が生まれた。

こうして自由大学の運動は長野県下に広がっていったが，そこに参加していったのはどういう人たちであつたろうか。

⁽³⁾記録にみるかぎり農業従事者が圧倒的に多かつたが，その他は商業，官吏，

教員，学生，製糸業，弁護士，新聞記者，軍人，宗教家，旅館業，医師，職工等々であった。変わったところでは，春奴とか静枝などという芸妓の名もあり聴講者の多彩さを知ることができる。

なお，自由大学での講義科目と講師の顔ぶれは次のようなものであった。⁽⁴⁾

恒藤恭（法律哲学），高倉輝（文学論），出隆（哲学史），土田杏村（哲学概論），世良寿夫（倫理学），大脇義一（心理学），山口正太郎（経済学），佐野勝也（宗教学），波多野鼎（経済思想史，社会思想史），新明正道（社会学），今中次曆（政治学），金子大栄（仏教概論），谷川徹三（哲学史），佐竹哲雄（哲学），住谷悦治（経済学），安田徳太郎（生物学）。

この講座及講師について猪坂直一氏は次のように述べている。⁽⁵⁾

「主として土田杏村氏のきもいりによるものだが，当時いずれも新進第一級とみられていた学者であったから自由大学に対しては世のいわゆる“成人教育”とは異なることが注目された。しかし世評の中には“自由大学はむずかし過ぎる”というのが多いのは当然として，“あれは社会主義，共産主義の研究所だ”というものもあれば，その反対に“自由大学はブルジョア講座だ”と批判する連中も多かった。聴講者の中に市長がいたり，芸者がいてはそう見られるのもやむを得ないことだったかも知れない。しかし私は自由大学をブルジョア教育だという批判に対して自由大学雑誌の中で“自由大学こそ資本主義に災いされない教育である”ことを力説した。」

具体的にどのような内容が講義されたのか明らかではないが，大学での一年分の講義が自由大学では5日間で終わってしまった，という講師も居たと言われ，かなり密度の高いものだったと思われる。

さて，長野県下の上田，伊那，松本の各自由大学のほかに，県外では新潟県に魚沼，八海の両自由大学，群馬県に前橋自由大学，宮城県に石ノ巻自由大学，東京に東京市民自由大学，福島県に東北自由大学等が続々と設立されていた。大学の数が増えるにともなって相互の連絡の必要もあり，また自由大学

運動のいっそうの発展をはかるという意味からも各自由大学を統一した連盟機関が必要となった。

1924 (大正13) 年 8 月 20 日, 長野県別所温泉高倉輝宅で自由大学協会設立の準備会が開かれた。出席者は上田自由大学から金井, 山越, 猪坂, 魚沼, 八海両自由大学より渡辺泰亮, それに高倉輝であった。協議の結果, (1)連盟を「自由大学協会」と名づける。(2)機関雑誌を発行する。(3)「自由大学協会規約」(土田杏村草案)の決議。(4)協会の専務幹事に猪坂直一を推薦。という 4 つの事項が決定された。

翌大正14年 1 月に機関雑誌として「自由大学雑誌」第 1 号が発行された。24 ページ 1 部 15 銭であった。執筆者には, 土田杏村 (自由大学へ), 新明正道 (忘れられたる花籠), 高倉輝 (露西亞文学研究(1))等の顔がみえる。

自由大学協会規約は 1. 目的 2. 組織, 3. 会員, 4. 役員及会議, 5. 会費及会計, 6. 事業, 7. 講師, 8. 附則の 8 章 10 条よりなるもので, 第 2 条には「本会は独立せる各自由大学の共通問題を共同的に処理し, 其の事務の連絡と統一とを得, 更に自由大学運動を全国的に派及^(ママ)する様努力することを以て目的とする。」とある。この時点での加盟校は, 上田, 伊那, 松本, 魚沼, 八海の 5 大学であった。

農村青年たちのささやかな哲学研究会に端を発し, 長野県から県外の各地にまで広がった自由大学運動は, 連盟を結成するまでに成長したが, 昭和初年にはほとんどその灯は消えてしまった。

1 つには, 農村の不況という経済的な打撃が大きかった。当時の文化講演会のように誰かがおぜん立てしてくれた集会にただ参加して話をきいて帰ってくるというのではなく, 参加者が聴講料を払って連続的に講義を聞くという自由大学の在り方は, それが大きな特色であったとはいえ, 一方において聴講者に多大の経済的負担をかけるものであった。だから自由大学が不況の影響をまともに受けて存立の基盤をゆさぶれたのは無理もないことであった。

さらに自由大学運動の大きな支柱であった土田杏村の病気の悪化と高倉輝の左傾も痛手であった。

大正末期から昭和初年にかけての社会状況の深刻化も，ある意味で教養主義的な色彩の濃かった自由大学の存続を許さなかった理由であろう。

この運動についてのまとまった研究や評価は今までのところ少ないが，杏村⁽⁶⁾とともに常に運動の中心にあった高倉輝は次のように総括している。⁽⁷⁾

「結局自由大学が全体としてどれだけの効果をあげることが出来たかということ，したがって，自由大学が実際にどれだけの意義を持ったかということ，もっと長い歴史に語らせるより仕方がない。だが，5里，6里の雪の山道をも厭わず，貧しい財布の中から毎月2円3円のお金を出して，そして講義を聞いて，帰る頃にはもう夜が明けかけていたというような，それらの聴講生の熱意が無意味に終ることは絶対に無いであろう。それは，人間として生産者として，あくまでもそれらの人々を養っている筈である。それはどういう意味かで，必ず日本の社会を大きく押し進める陰の力となっているに相違ない。」

以上が長野県を中心にみた自由大学運動の概観であるが，この運動のもっていた歴史的な意味と限界を，総体として明らかにするためには，長野県下における運動のみでなく各地に誕生した自由大学の実態を詳細に解明して見る必要があると思われる。ところが従来長野県以外の自由大学については，その実情がほとんど知られていなかった。この小論では，さしあたり新潟県に創設された，魚沼，八海の両自由大学について可能なかぎりの解明を試みてみたいと思う。

(註)

- (1) 宮坂広作著，「近代日本社会教育史の研究」(460～461ページ)
- (2) 伊那自由大学パンフレット，「自由大学とは何か」
- (3) 自由大学雑誌第1巻第2号26ページ。及び猪坂直一著，「枯れた二枝」(49～50ページ)

- (4) 猪坂直一著「枯れた二枝」(52～54ページ)
- (5) 前掲書(51ページ)
- (6) 宮原誠一著、「教育史」(254～256ページ)，平沢薫著、「社会教育の展開」(149～150ページ)等においてわずかにふれられているが，最もまとまったものとして，前掲宮坂の「近代日本教育史の研究」のうち第3部近代日本における社会教育運動の思想と実践，猪坂直一著，「枯れた二枝」，雑誌「教育」昭和12年9月号の高倉輝論文等がある。その他に上木敏郎編集「土田杏村とその時代」(第7，8合併号)がある。
- (7) 雑誌「教育」，昭和12年9月号，「自由大学運動の経過とその意義」(高倉輝)

2. 魚沼，八海両自由大学の誕生と活動

魚沼自由大学は，1923（大正12）年8月新潟県北魚沼郡堀之内村⁽¹⁾に誕生した。八海自由大学は，同年12月新潟県南魚沼郡伊米ヶ崎村⁽²⁾に誕生した。

これよりさき大正11年8月に，両村には「夏期大学」が開かれ，土田杏村，高倉輝等が講師として来村していた。

伊米ヶ崎村における夏季大学は，名称を八海夏季大学と言い伊米ヶ崎村小学校校長渡辺泰亮の努力によって開設されたものであった。渡辺は伊米ヶ崎村の人間であったが，新潟師範出のインテリで，師範時代土田杏村の2級後輩であった。学校時代から2人は親交が厚く卒業後も交信が続いていた。そんなところから渡辺は長野県における杏村らの自由大学運動の話を聞き，また杏村からのすすめもあって伊米ヶ崎村に夏季大学を開いたものと考えられる。いわば土地のインテリの啓蒙活動的色彩を帯びて生まれたものであった。

一方堀之内村の夏季大学は発生の事情が多少ちがっている。

1922（大正11）年8月，上越線が長岡より堀之内村まで開通した。鉄道の開通を記念して商工業に従事している同村の青年たちの親睦団体「響倶楽部」は

記念事業を計画していた。そのころ堀之内村丸末書店の店員中条登志雄はかねて懇意の渡辺泰亮に夏季大学の構想を聞き、響倶楽部の青年たちと図って記念事業としてこれを具体化することになった。これに同村の数名の教員が加わり、さらに堀之内村出身の関魚川が主筆の地位にあった北越新報社が後援して夏季大学が実現したものである。魚沼夏季大学と呼ばれた。

その時講師として招かれた杏村は、「教育ノ基礎トシテノ哲学（自由教育論上巻）」と題し次のような講義をした。

第1論 教育ノ意義

問題ノ提出 教育者と被教育者 教育可能ノ問題 被教育者へノ影響
(ママ)
 響 影響ノ継続的意識的 環境ノ問題 究極理想ノ予想 批判的
 教育学ノ立脚点 教育概念ノ中心的構成 教育概念ノ決定 教育ノ
 客体 人格自律ト自由教育 教育者ト教育客体 影響ノ特質

第2論 教育ノ目的

存在ト当為 規範ト自然概念 価値ト快苦 価値ト実用 主観及ビ
 人格 文化ノ概念

第3論 個人ト社会

社会ノ構成 自由及ビ奉仕ノ概念 理想ノ社会

第4論 教育者及ビ被教育者

人格ノ自律ト教育 実践理性ノ優位

但しこの時の講義では第1論に重点が置かれ、第2論以下は簡略なものであった。

この時の魚沼夏季大学には約300人の人間が参加した。⁽⁴⁾八海夏季大学のことは不明であるが、翌大正12年3月1日付杏村より渡辺への葉書には、杏村の次のような提案がみえる。

「8月の会のこと、あれは2度にやるのは運動として不利益だ。八海と魚沼と合併するなり、8月だけ魚沼主催、八海後援とするなりで、1度に1箇所

でやる方がよいと思ふ。これは高倉君も君の方から帰って頻りにいって居た。もっと具体的の君の腹案をきかせてくれたまへ。そろそろ講師をたのまないとおそい。」

しかし結局2つは合併することなく、この年8月と12月にこの「8月の会」は自由大学と名を変えてそれぞれ正式に発足した。「自由大学」の名を冠することについては、講師の選択を打ち合わせる次の手紙の中に、杏村の考えが表明されている。

「渡辺君 今朝電報を打っておいたからもう見てくれたことと思ふ。

山本宣治君（京大，理学部講師）は別紙のように承諾してくれた。これで2人出来たからまあ開会は現実になった。山口君からはまだ返事が来ない。日取りは山本，高倉2人に打合せさせるとよい。2人は親戚の間柄だから。山本君の性教育論は随分立入った話をやることと思ふ。わきの方の影響が悪いと思ったら，手加減をして貰ひたまへ。併し京大主催の講習会でもやるのだから差支へは無論ないと思ふが。田舎のわからずやはひょっとするとびっくりしようから。

2人とも婦人にもよい。いつか午後にでも婦人デーをやりたまへ。僕は開会の日に2人の紹介をかねての長文の祝辞をおくる。君からよんで貰はう。

会の名称も夏期大学では平凡だが「魚沼自由大学」としてはどうか。啓明会でも今年は自由大学と銘を打ったし，東京のは前から市民自由大学だ。この方がこれから新らしい気分を象徴する。夏期大学とか夏期講座とかは何だか生ぬるい空気の気がする。——後略——⁽⁵⁾。」

こうして1923（大正12）年8月，魚沼自由大学は発足したが，病気のため発会式に欠席をよぎなくされた，杏村は，次のようなメッセージを送った。

「魚沼自由大学の盛会を祝します。自由大学へ高倉，山本両君を講師として御紹介することの出来たのは，私の非常に光榮とするところであります。

高倉君は，非常に長い間外国文学特に露西亜文学を研究して居られた学究

であります。

高倉君のように苦しんで、厳格に、露西亜文学を研究した人は少ないことと信じます。其事は同君の「蒼空」や「我等いかに生くべきか」をお読みになった人の痛切にお感じになる点であらうと思ひます。然るに同君は此の数年来は其の下準備を基礎として、全然創作の中へ没頭して了はれました。ここにも亦驚嘆す可き高倉君を私は眺めて居ります。

山本君は京大理学部の講師でありますから、本当の意味の学究であります。単に学究たるには少し熱血が動き過ぎます。性教育や産児制限問題などに就ては我国の第一人者であり、本年夏の京大の講習会では、此処と同じ題目の性教育を講義し、老大家の河上博士の講義に次ぐ多数聴講者を得ました。今後同君がどういふ途を進まれるかは、満目の等しく注意しつつあるところであります。

高倉君、山本君は、共に古い階級を代表せず、まさに生れんとする新時代の先駆者として、文壇、論壇、学界の少壮花形となって居られる人達でありますから、必ずや諸君と共鳴し合ふものがあることと思ひます。

我々の自由大学は何等かの主義主張を宣伝する為の機関では無い。我々はただ教育の上に於てのデモクラシーを叫ぶだけである。我々すべてが、春夏秋冬、高い教育を受けることの出来る機関を作りたいと希ふだけあります。

両君は民衆運動に深い同情を持って居られ、悦んで魚沼自由大学へ出講せられました。私は両君と親しい友誼を持ち、且つ両君への出講を御依頼するお使ひをした関係上、ここにいささか両君を御紹介申しました。

最後に私自身のことを申します。先きに確実に出講を承諾して置きながら、病気の為、全然其の約を破毀しなければならぬ事になった罪を、ひとへに幹部諸君並びに聴講者諸君におわび申します。幸にお許しあらんことを希ひます。」

(156)

魚沼，八海両自由大学の成立と経過

会場は堀之内小学校を使用し，参加者は約 150 名であった。この時の時間割は次の通りである。

8月6日午前9時

高倉輝 近代思潮論

同午後1時半

高倉輝 婦人の為の講演 恋愛と家庭

8月7日午前8時

高倉輝 近代思潮論

同午後1時

沖野岩三郎 科外講演 宿命されたる個人は如何にして自由を得べきか

8月8日午前8時

高倉輝 近代思潮論

同午後1時

山本宣治 性教育論

8月9日午前8時

山本宣治 性教育論

同午後1時

中山晋平 科外講演 音楽実地指導

8月10日午前8時

山本宣治 性教育論

同午後1時半

山本宣治 婦人の為の講演会 性の問題

以上のような5日間にわたる講義ののち第1回の魚沼自由大学は幕を閉じた。

さて，この時のもようを講師の1人 山本宣治の手紙によって見よう。山本は講義の合間をみて8月10日堀之内村から京都の杏村にあてて次のように書き送っている。

「(前略)教壇のわきに立てた雪塊は、大都会の花氷のやうな人工味もなく、豪壮な涼味を覚へます。京大のはより集まりの教育者で皆中々威厳を保つのに苦心して居たらしく中々笑ひませんで私も何かギコチなさを感じたのですが、ここでは自然な笑声も湧いて来る。之が何よりも私を涼く思はせる。8日午後、9日午前と既に約5時間話しました。今日は朝ひる共にぶち通し埒をあける考えです。京都のよりもコンデンスされて内容もより豊かになったと自信して居りますが、殊に目下病(一種の神経痛)に悩まされつつも其を排して忍んで三面六臂の大活動をして居られる渡辺君にも感謝しつつ、私も出来るだけの事をやって居りますから、魚沼自由大学の第2期の結果は悦ばしいものでせう。一略一。堀之内の諸君は私を歓待してくれます。殊に若い人々の真険な態度と婦人聴講者の忍耐熱心とに感激せざるを得ません。人生觀に動揺を感じたといふ人もありますが、高倉氏と私によって与へられた刺戟がどういふ反響をもたらすでせうか。「文学青年」の無い事、教育者の内、特に若い人々に熱烈な確信と深い蘊蓄体験を具へた人の多い事は関西農村の「知識階級」と異なる愉快な点で、雪の冬の影響もあろうかと興味深く観察して居ます。⁽⁶⁾」

ところで大正10年代の新潟県にあっては、官製の「夏季大学」も盛んであった。民衆が自らの意志によって自ら作りあげた「自由大学」と、お上のお仕着せの官製夏季大学との違いを次にみよう。

1922(大正11)年8月、新潟県当局は越佐夏季大学という名の官製講演会を開設した。翌大正12年夏、ちょうど魚沼自由大学が誕生した同じ8月に、越佐夏季大学は第2回めの開講を迎えていた。そのもようを、大正12年8月2日付北越新報は次のように報じている。

「赤倉温泉の越佐夏季大学 最新式の無線電話講話 聴講者632名」という見出しに続き、

「赤倉温泉に開会の第2回越佐夏季大学は1日より妙高小学校に開会、聴講

者 632名内女子 53名，午前 8 時開講式を挙げ知事代理千葉内務部長開講の辞を述べ講演に入る，第一席京都大学教授野上法学博士は能率増進の三問題と題し世界戦争後，国際間の競争は兵力，金力を超越して人力競争となりと前提し適材適所，境遇の改良，仕事の過程の改良の三問題を詳説し，適材適所の各論に入り，個人差を詳説し，人類採用と職業選択とを詳論し，午前11時半一先づ終了。更に午前11時半より東京高等工業学校教授竹内理学士はインシュタインの相対性につき，「相対性と物理学の将来」と題し相対性の理論を説き午後 0 時半ひとまず休憩，午後 1 時半再会，相対性に就ての講演を続け午後 3 時終了，それより京都帝大教授鳥飼工学博士は無線電話の講話を開くにつき実験を毎日午後 3 時より 5 時迄行ない聴講者に聴助せしむべく 1 日新潟，長岡，高田 3 市外の聴講者に聞かしめたるが午後 5 時終了したり。因にこの無線電話は最も新式のものにして京都大学に於て本年 4 月大阪の文化講座に於て実験し公衆に示したるものにて今回は第 2 回目なりと。」

「能率増進の三問題」などを掲げている越佐夏季大学と，魚沼自由大学の比較はわれわれにさまざまな事を示唆して興味深い。

ところで，魚沼自由大学の誕生を知った新潟県当局はこの年の秋，自由大学運動の弾圧にのり出した。次にみるような「注意書」を，県内の郡市長，町村長，青年会長，学校長等に発している。

「近時一般民衆の知識欲旺盛に趣き結果各地に於て講習会講演会夏期大学等を開催するもの逐年増加するは一般文化の進展上慶賀に堪へざる所なりといえども往々にして講師の人選に周到なる注意を欠き講師其人の思想の傾向発表方法等頗る寒心に堪へざるものありて其筋に於ては予而特別の注意を要する人物として取扱はれつつある者たるに拘らずこれを講師として招聘し講演を聴かんとするものあるが如きは大いに考慮を要する次第に有之候条亦今講師の人選に関しては主催者に於て一層周到厳密なる調査を遂げかかる人物を講師として招聘すること無之様十分御注意相成様致度此段及移牒候也。」

この注意書を読んで杏村は怒った。これを単に一自由大学への圧迫と微視的に受けとるのでなく、時代を覆う危険な徴候として受けとめた彼は、早速、「震災に際しての思想戦」という一文を草し東京の報知新聞に発表した。これは同紙上に4回にわたって分載された⁽⁷⁾。そのなかで、彼は次のように反駁する。

「県自身が毎年大規模の夏期大学を開催して居たけれども、其講師は御用学者許りであって青年の要求を充たすに足りないから、我々は昨年以来自由大学を創設して新らしい空気の思想運動を起した。」と主張したあと、

「この牒書を読んで見れば、或いは社会主義者を講師にしたものの様に聞えましょう。然るに我々が事実を調査したところでは、この中の「其筋に於ては予而特別の注意を要する人物」に該当するものは、沖野岩三郎氏及び京大理学部講師山本宣治氏であった。沖野氏は文学論を為したが、氏の思想に特別の注意が必要だとも思はれない。思想的にはもっと幼稚な朝鮮や満洲でさへ氏の講演を歓迎して居た様に記憶する。山本氏は性教育を論じたのであるが、これは京大主催の通俗講習と内容の同じものであった。しかるにそれ等すべての講師を一括し、指すに「かかる人物」とは何たる無礼ぞ。

議員選挙の時に其の候補者の或物を指し、「彼は其筋の予てより特別の注意を払って居るものだから、かかる人物に投票するな」との注意書を県民に発したとすれば、何人もかかる赤裸々な選挙干渉は無いとし、憲政の一大恨事としてそれを攻撃するであろう。しかるに各県に於て現に行なはれつつある思想干渉は、遙に其の選挙干渉に過ぎて居り、しかも其の遣り方は専制的である。ただ其の干渉が一見しては法律のどの文句にも抵触して居る様に見えるものだから、平然として為さるるまでの事である。けれども原則としてそれは思想の自由を拘束した、許す可からざる憲法違反でさへある。」

報知紙上で反撃したあとすぐに杏村は伊米ヶ崎村の渡辺泰亮にあてて長文の手紙を送っている。次はその一部。

「決して妥協してくれたまふな。あの訓示はあまりひどいから、東京の報知

新聞にかいておいた。痛烈に罵倒した論文を4日間書いた。君には全然関係なくかいた。

もっと県が圧迫したら後藤に上申するつもりだ。後藤は自分で夏期大学をやってるからよくわかるつもりだ。

何にせよ、教育界にはやる仕事沢山ある。県の馬鹿どもを合手にしないで、我々は我々の魂の声にきいて動かうではないか。⁽⁸⁾

伊米ヶ崎村小学校長という「公職」にあって、しかも当の自由大学の中心人物であった渡辺に対する杏村の心づかいが見える。

県当局の圧迫にもかかわらず、魚沼自由大学に続いてこの年12月、八海自由大学が続いて創設された。1923（大正12）年12月16日である。午前10時より伊米ヶ崎小学校に多数の聴講者を集めて発会式が行なわれた、と当時の新聞記事にみえる。⁽⁹⁾

この時、高倉輝は「発会式に臨みて」と題して次のような演説を行なった。

「私は「八海自由大学」の発会式に臨んで劈頭諸君と見ゆるの光栄を有するを得たことを心から喜びとする者である。

先ず第1に私はこの自由大学の創立に対する諸君の異常なる「熱」に対して心からの愉快なる愕きを抑へることが出来ない。この熱とは言ふまでもなく諸君が諸君自身を教育し成長されんとする所の已むを得ざる熱望であり、またこの熱望こそは現在あることろの公立大学の制度の徒らに唯だ学生に職業を与ふるのみの機関に墮しつつあるに対して正に確然と自由大学存立の意義を植えつける所のものであり、而してまた同時にこれこそは諸君がやがて来らんとする光栄ある時代の健全なる一単位としていま確実にその参与の資格を把持しつつある何よりの証左である。即ち諸君は已に諸君の健全なる職業を持っている。この自由大学によって諸君の職業の上に何等かの私益を得えようと言ふ毫厘の野望をも持っていない。

即ち諸君のこの学問芸術に対する熱望はあたかも渴ける者の水を求める如

き純粹なる已むことを得ざる熱望である。而して本来学問芸術とはかかる純粹に飢えたる者の場合に於てのみこれに豊かにして健全なる滋養をす可き性質のものである。即ち諸君の精神がかくの如くに飢えている限り恐らくはこの自由大学は永久に続くであろう。而して恐らくは永久に諸君を養ひ諸君の成長を助ける最も大いなる糧となるであろう。ここに私もこの「八海自由大学」の一員として永久に諸君と同じ道を歩き、永久に自己の成長を計らうとするの喜びを分たうとする者である。⁽¹⁰⁾

こうして魚沼，八海の両自由大学はその歩みの第一歩をしるしたが、ここで自由大学発祥の地となった堀之内村と伊米ヶ崎村について簡単にふれておきたい。

堀之内村の人口は、大正13年の記録では総数7,580人、そのうち男3,809人、女3,731人で、世帯数は1,389戸であった。上越線の開通によって当時村は活気を呈していたが、大正13年1年間の堀之内駅の乗者人員は79,210人、降車人員は78,115人、旅客収入金は33,837円32銭であった。村当局の教育に対する熱意が特に高かったとも思われないが、村史をたどれば次のような事実がある。

明治36年、教育の徹底は環境の如何にある、という認識にたつて堀之内村教育会を創設している。事業としては、教育の補足、優秀児、無欠席児の表彰、忠良孝子の表彰、文庫の経営などであり、必要経費は村の補助金と村内有志によってまかなわれていた。これは支那事変の頃に解散している。

大正5年には大正文庫が創設された。これは大正3年5月7日に大正天皇御即位記念事業として村内巡回文庫の設置が議決され、それにもとづいて創られたものであった。主として青年会と村内有志の努力によるものであり、収容書籍は643冊を数えている。

大正10年12月には農商補習学校を創設し予算2,826円を計上している。

伊米ヶ崎村にいたっては文字通りの僻村であった。

大正13年同村の総人口は2,878人、そのうち男1,459人、女1,429人、世帯数

は503戸であった。開通した上越線からも遠く、交通不便な寒村に自由大学が生まれ、そこに知識を求める多くの人々が集まり、続いたという事実は驚くに値する。

さて、翌大正13年夏には第2回めが開講されるのだが、その前に次の2点にふれておきたい。

一つは魚沼自由大学を推進していく人々の間に内紛があったということである。将来の自由大学の在り方について見解を異にする二派が生まれ、結局、響倶楽部の主流は魚沼自由大学から手を引くことになった。その結果、残った者はあらたに同人組織魚沼自由大学を作りその後の運営にあたることとなった。結集した同人は約30名、代表者は林広策、主力同人には中条登志雄、森山新蔵、加藤金治等がいた。

次に、杏村や渡辺らの間でも自由大学のもち方についていろいろな反省があったらしい。のちにみるように次回大正13年夏の魚沼自由大学の姿は、長野県をも含めて自由大学の歴史のなかでは異色の様相をみせている。つまり自由大学のなかに、まじめな講義だけでなく、娯楽的要素をも添えたことである。その間の事情を杏村の次の手紙が語っている。

「講習の件、魚沼と八海と2箇所で作るのはどうしても不利のように思ふがどうか。若し八海でバツとしたものをやり、魚沼でじみのものをやれば、八海の方ばかり聴講者多くなり、魚沼は非常にさびれることと思ふ。魚沼の方もどうかして生かしたい。冬は八海の方でやれば夏は魚沼の方でやるとか、そこに何とか妥協の方法はないか。そして自由大学の理想としてはしっかりと落ちついたのがよいのだが、信州ほどに文化が開けず、やはりバツとしたのがあたるとすれば、その中間を取り、バツとしたところ1人位に、じみなもの1人、とかいふ風にして漸進的にやって見るか。今の新潟県の状態じゃあ、とてもじみなもの許りでもいけないね。上田などはもう自由大学に信頼しきって居るから学課により、大して聴講者に変動はないが。

もう一度よく魚沼の方と相談して見られてはどうか。どうかして2箇所とも生かしたいものだ。」⁽¹¹⁾

さて第2回めの開講を前にして、杏村らは自由大学に対する理解を求めてさかんな啓蒙宣伝活動を始めている。次に掲げる文章は「自由大学の意義」と題する杏村の呼びかけである。

「(前半の部分は省略)自由大学はすべての社会人を終生的に教育する教育設備である。勿論それは単に知識を教へる謂では無い。自由大学の学習は、自己教育を本位とするから、開講せられて居る期間は甚だ短かいが、其の講義は毎年連続し、且つ其の講師にも変更が無いから、我々は自由大学に於て、静かに深く自己の教養を進めることが出来る。自由大学は農村の労働を奪ふことが無い。寧ろ自由大学の理想は、労働しつつ学ぶ人格をつくることに置かれて居る。のみならず自由大学を支持して行く計費は極めて僅少のものであってよい。

我国の現状を見れば、改造せられなければならぬものは多々あるが、しかし其の何れの改造も、根基に教育の充実を置かなければ何の意義をも発揮し得ないもの許りである。社会の此の重大なる危機に臨んで、私は1日も早く自由大学の制度が全国的に行き亘ることを希願しているものである。

自由大学の理想は確然として、此れに一点の疑義の介在することも許されては居ない。ここに同じい成人教育の目的を遂行しつつも、教育の方式として我々の満足しがたき2つの施設が、現に社会では実行せられているから、其れに就き一言を費して置きたい。第1は、以前から各地に開催せられて居る所謂夏期大学である。私は其れに全く反対するものでは無いが、しかし、近時の夏期大学が徒らに形式倒れとなり、實質に於て次第に低下しつつある事は疑へないと思ふ。のみならず其の講義が断片的となり、聴講者の自学的習慣を養ひ得ない点で其れは根本的の欠陥を持って居るやうである。若し今日の夏期大学が此の欠陥を救済したとすれば、其の結果は当然我々の自由大

学となるであろう。しかし自由大学以外に此種のあることには、我々は賛成こそすれ、無下に反対しようとするものでは無い。第2は、近時関西の諸地方に設立せられつつある所謂公民大学である。公民大学は我々の自由大学より後れて発達したものであり、其の設立者は現に公民大学を本位としての教育理想なるものを持っては居ないが、元来我々の自由大学の方法を模して設立したものであるから、其の方法だけを見れば自由大学と何の相違をも持たぬものの如くに見える。しかし我々の場合には民衆自身の要求に発し、民衆自身が其れを設立し、支持して居るに対して、公民大学の場合には、其れの設立は民衆の要求とは別に出発し、其れを設立し、支持するものが郡教育会、郡其のものといふが如き官公的集団なる点に於て、我々は此れと其の理想を別にしなければならぬ。勿論、我々は官公的集団其のものを排斥するのでは無く、其れには固有の社会的任務あることを十分に容認するものであるが、自由大学を設立支持するものとしては、官公的集団は最適者でないことを此処に高調して置きたい。教育とは自律的人格をつくることであり、且つ成人教育に於ては特に自学自治の習慣を養成生長せしむべきものなるが故に、官公的集団が成人教育機関を設立支持することは、実は民衆に対して親切なるものでなく、且つ理想として、自由大学の高調する教育の自由を奪ふことになると思ふのである。此の故に我々は飽くまでも、其等の集団より離れ、民衆自身の要求に即して自由大学を設立し、民衆自身の熱心によって此れを支持して行かうと思ふ。郡教育会其他此れに類する官公的集団が自由大学を側から援助することは、我々の歓迎し、感謝するところなるは言ふまでも無い。

自由大学を通ほしての成人教育は、我々の世紀の教育理想となり、近き将来に全国化せらるるに至ることを、私は今、確信を以て断言し得るものである。」

文中、「官公的集団」に対しての批判があるため、この時も県当局からある種

の圧迫があったが、その内容の詳細は今はわからない。

杏村は更に新聞紙上にも一文を草して自由大学への参加を広く呼びかけている。次は大正13年7月10日付北越新報所載のもの。

「我々の自由大学の季節が来た。友よ、鋤を捨て、鎌を収めて、新らしい講義を聞く人とならうでは無いか。どんな新らしい呼び声が我々の耳に響いて来るか。其れを思ふのは今から大いなる楽しみだ。

我々は人間になるのだ。人間らしい人間になるのだ。からっぽな政治騒ぎや、村治の改良が何のやくに立つか。我々は先づ自分の精神をしっかりと建設しなければならない。自分は家庭の事情で大学へまで進んで行く事が出来なかった。けれども自分はかうして労働する事を、人間として光栄だと信ずる。さうして今は家に居ながら、此の労働のあい間に、大学の講義を系統的に聞くことの出来るは、何といふ悦ばしさだ。自分は労働をする。そして此の講義を忘れない。自分の知識は磨かれて、堂々たる学者の其れにも達しよう。けれども自分は一個の農夫だ、商人だ。其処に黙々たる生活の自信がある。

友よ、我々を呼ぶ自由大学の鐘は高く鳴って居る。さあ、鋤を捨て、鎌を収める時だ。我々自身の守り立てて居る学校が開かれるのだ。魚沼自由大学、八海自由大学、其れが今我々の生活を導いて居る目標だ。

我々の自由大学は、所謂夏期大学とは類を異にして居る。我々の自由大学は毎年連続した講義を以て進められて行く。知識の断片を得て虚栄を大きくするのでは無い。考へる仕方を深めて人間の品位を高くして行くのだ。そして此の自由大学を、誰れからも強制せられず、自分自身の内面の要求から、あらゆる犠牲を忍び、共同の努力で擁護して行くのは、何といふ壮快さだ。

我々は今いろいろの計画を持って居る。其れは此れから次第に実現せられて行くだらう。今はまだ自由大学の芽が生れ出ただけだ。枯らすも生かすも、其の責任は我々自身にある。友よ、1人でも多くの友を呼び起して、我

々の新しい講義を聞かうではないか。自由大学の鐘は今しきりに鳴っているのだ。

我々は所謂夏期大学のやうに形式ばかり大きく内容の空っぽなものには飽き々々した。あのお祭り騒ぎの中から何が生れよう。我々の学校は丸太造りだ。柱からはまだ葉のついた小枝が出て居るだろう。けれども其処での講義は何処までも澄み切ったものだ。晴れた八海山巔の星夜のやうに。其処での思索は内面へ突き進んで、何処までも深いものだ。神秘の蔭深き魚沼の森林のやうに。

友よ，自由大学の鐘は今しきりに鳴って居る。川を越え，山を越え，草の畝に，木の葉の上に。友よ，さあ鋤を捨て，鎌を収めて，待つて居た新しい講義を貧り聞く時が来た。」

パンフレットの発行や新聞を通しての宣伝活動のあと，第2回めの自由大学は大正13年8月次の日程で開催された。

まず八海自由大学は，

8月1日，2日

山口正太郎（帝大大阪高商教授） 理論経済学

8月3日

野口雨情 童謡及民謡講義

この時の会場は伊米ヶ崎小学校ではなく，少しはなれた，魚野川の対岸浦佐村の普光寺というお寺であった。会員外からは1科目につき1円50銭の聴講料を徴収している。

初日は午前9時に開講し，渡辺泰亮挨拶のあと講義にうつったが，この時の聴講者は約150名であった。

3日めの野口雨情の講義は，午前中は童心芸術についての話があり，午後は2時から童謡教育について述べたあと一般質問にうつり4時に閉講した。当時すでに「枯れすすき」の歌で野口の名が知られていたためか，聴講者はさらに

増えて200人を越えた。

一方，魚沼自由大学はこのあとをうけて，8月18日から20日まで3日間堀之内小学校を会場として開催された。

講師は高倉輝と由良哲次の2人であった。この時由良は「現代の哲学特にナトルプについて」と題して講義している。

時間割は，初日は午前9時から2時間高倉の講義，終わって30分の質疑応答。午後2時から4時まで由良。2日，3日めは午前7時半開講，午前中を高倉の講義にあて，午後は由良が受けもっていずれも4時に終了している。

参加者は約100人，会員外からは3円の聴講料を徴収したが，北魚沼郡内ばかりでなく，遠く古志郡，長岡，南魚沼郡，中魚沼郡等からも聴講者があった。教員，学生が最も多く，その他は農業，商業，女性や僧侶という顔ぶれであった。

さて，前述したようにこの時の魚沼自由大学には注目してよい1つのことがある。それは自由大学に多少の娯楽的要素が加味されたことだ。具体的には絵の展覧，レコードコンサート，仕舞の上演である。

堀之内村出身の宮芳平は洋画家で，文展や大正博などに入選した絵画きであったが，この時休憩室に自分の作品50余点を展示して観覧に供した。

また，小千谷町（現在は小千谷市）小船井時計店主は昼の休憩時間にレコードコンサートを開いた。

さらに同地にあった踊りの同好会で瓢会の会員有志は，かねて本本彦作氏^{ほんもと}について練習を積んでいたが，この時休憩時間を利用して田村，松風，小袖，曾我等の仕舞を演じた。

自由大学が地味な学習の場というよりも，地域の文化センター的役割を負っているかのように見えるが，このことのもつ意味にはここでは深くふれず，事実を記すにとどめたい。

第2回の両自由大学は以上のようにして幕を閉じた。

ところでここに、この時講師として来校した由良哲次がのちに渡辺泰亮に送った手紙がある。⁽¹²⁾由良は滞在中の礼を述べたあと、次のように書いている。

折角の学を愛する熱誠なる青年諸君の御招きによりたるにかかはらず全く小生の未熟と不才の為毫も御期待にそふ能はず徒らに諸君の時間を空費したるの罪は実に慙愧にたえません。——略——。小生の責務としてかの講演の結末だけはつけるの義務ある為来春3月以後（3月までは試験と論文にて全く閉口です）開講の期に番外として附加下され、かかるもの（筆者註 謝礼金）は重ねて受けぬこととして、有志の人々にのみかの続き西南学派とマルブルヒ学派の大要を語って結末だけはつけたいとの責任感にうたれて居ります。いつでもよろしいから必ずもう一度参ります。」

教育というもののあるべき姿の1つが、教える者と教えられる者という硬直した関係を否定し、相互変革を媒介としつつより高い次元へと成熟していくものであるとするならば、教えを受ける青年たちの、知識を求めるひたむきな熱意が講師を突き動かしていった自由大学の授業のなかに豊かな教育の可能性を見出すことができるであろう。自由大学の講義は、大学程度の内容を、大学へ行けない地方の青年たちに単に与えたものだと受け取られがちであるが、高倉輝の例を引くまでもなく、講師たち自身が逆に教えを受けたという側面も見落してはならないと思われる。

第3回以降の両自由大学の様子は現在のところ明らかでなく今後に期するよりないが、判明している事実のみ列挙すれば次の通りである。魚沼自由大学については、

大正14年1月

富田碎花（関西学院教授） アイルランド文学史 堀之内小学校 参加約40名

大正14年12月12日より5日間。（12日は午後2時より、13日は午前午後その他は夜間2時間）。

住谷悦治（同志社大教授） 社会思想史 堀之内小学校 参加約40名
この時の聴講料は1円であった。

昭和2年6月

今中次麿 政治学 堀之内小学校 参加約50名

八海自由大学については、

大正15年12月26日から3日間

柳田謙十郎 リッカート，認識の対象概論 伊米ヶ崎小学校

さて両自由大学がいつ頃まで存続したかは現在必ずしもはっきりしないが、昭和の初年には消滅したと思われる。支柱であった渡辺泰亮は、大正15年に新潟県視学として転出した。

さて、自由大学における講義内容が、具体的にどんなものであったのか興味をもたれるが、最後に当時の参加者の筆記ノートを再録する。

次に掲げるものは、大正15年12月、八海自由大学における柳田謙十郎の哲学講義を、当時小学校の代用教員であった伊米ヶ崎村の桑原亮川氏がノートしたものである。

題目は、リカード 認識の対象概論⁽¹³⁾ 第1章 認識の対象 第2章 主観と客観 第3章 内在論の立場 第1節 原因としての超越的实在概念 1.（見出しなし） 2. 補充としての超越的の概念 3. 意志に対立するものとしての超越的の概念 第4節 意識一般と心的实在との区別 第4章 判断と其の対象 第1節 判断する事と表象する事 第2節 承認としての認識 第3節 判断必然性 第4節 Sein と Sollen（事実と価値） 第5章 認識の対象としての不許不^(ママ)

講義内容は以上のようになっている。ここでは全部を収録することは紙数の都合上不可能なので、第1章の一部分のみとする。なお転載にあたっては原文のままとした。又、講演後精神講話として、「田口職工の美談」なるものがあったことをつけ加えておく。

第1章 認識の対象

『哲学は驚異から始まる』と古の哲人は叫んだ。懷疑は来る可き真新への門であるより徹底したる懷疑はより深き新真への扉である。自己の魂の根に秘められるたる罪の意識に何の羞恥をも煩悶をも感ずる事の無き世上の善人は仏の悟りからは尤も遠ざかった無縁の衆生である。現実の生活に対して、何の不満をも感ぜざる人は世界の隅々に渡って充ち溢れる神秘に対して、何の疑惑をも驚異をも感ずる事の無き人である。これ等の人に対して哲学は必要はない。哲学はただ人生の神秘なる扉の前に立って、根本的に自己と人生と宇宙とを疑ふ者の為にのみ与へられる緑の草である。

常識は独断である。彼は瞬間の反省に依って疑ひ得べき殆ど自明の否真理をも、それが彼の生活の便宜に役立つ限り自ら眼を塞いで現金に通用させて省ない。彼は思ひ切って、無反省な功利主義者である。随って、哲学は決して常識からは生れない。常識に対する反逆からのみ哲学は生れるのである。

かくて常識は言ふ「此の世界と自己とは吾人が表象するが如き姿態を持って、吾人が感覺するが如き色と明暗とを持ってゐる。又吾人が知覚するが如き大きさと位置と形とを持って此の時間と空間との中に厳存する。我等の認識の真と疑とは只この客観的なる対象の実相を忠実に吾人の主観的表象の中に取り入れるか否か、換言すれば、吾人の表象が客観的なる其の対象的實在の模写として其の原型に一致するか否かと言ふ事に依ってのみ決せられる。これが完全なる模写たる限り、それは完全なる認識である。それが不完全なる模写たる限り不完全なる認識である。其の不完全性は更に度を越えて、最早何等の模写としての意味をもたらさぬ限り、それは何等の真理をも持たぬ誤れる認識となる。

彼等の斯の如き思想又は信仰には2つの重要な momento 契機がある。其の1は、認識の主観と客観、換言すれば認識するものとされるものとは、全く相対立せず独自なる實在として各々其の存在を保つこと、他の1つは此の

各々独自なる実在は、主観の認識作用に依って、完全にか不完全にか、兎に角模写されることが出来ること之れである。此の二者は彼等の思想に共通なる盲目的信仰として、彼等の独断の底流をなしてゐる。疑惑に輝く哲学者の眼は、先ず此の2つの独断の前に閃かなければならぬ。冷く光る科学者のメスは先づ此の封ぜられたる屍体の上に振はれなければならぬ。(古代に於ては哲学者は又科学者であった。)

かくて哲学者は言ふ。此の世界は——実在としての宇宙の真想は決して我等の感性知覚に現るる如き姿態と性質とを持ったものである事は出来ない。

吾人の感覚する如き色と明暗とをもつて、又吾人の知覚するが如き大きさと位置と其の変化(運動)とをもつて、実在するものではない。仮令ば色は我等の眼球と之れに分布する神経との構造に依つて、我等自身の主観に生じた感覚であつて、決してそれは客観的な実在そのものが有する性質ではない。音は聴官の構造に基く我等自身の感覚である。我等より独立なるもの、或ひは其の性質ではない。同様にして、味ひも匂ひも触感的種性質も皆我等の単なる我等の主観的表象以上の物である資格を持たない。実在の世界は到底斯くの如き世界である事は出来ない。随つて又これは無音無色無味無嗅の世界でなければならぬ。五官に依つて吾人が表象するが如き世界は、それは単に吾人にとって、^(ママ) Soerscheiln 然が見える現象界 ^(ママ) Eischelnnysuelt である。

本当の実在の世界は此の現象界の奥に有つて、其の現象界存立の根拠 ^(ママ) Geln を為す Etwas でなければならぬ。

此のエトワスは、吾人の感性認識では、到底達する事の出来ない特殊の世界、それはただ我等の理性のみが辛ふじて、認識可能性を有する世界でなければならぬ。

哲学者達はかく論証した上各々得意の鼻を蠢かして、常識を尻目にかけて乍ら、彼等の得意な世界に入つて行く、斯くして彼等は自ら其のエトワスの世

界，宇宙の本質の世界を彼等の理性に依って認識する事が出来ると信じ，ある者はそれは水だと言ひ，或者はそれを火だと言ひ，空気だと言ふ。或者は地水火風の四元だと言ひ，又或は更に小六ヶ敷くトアパイロンでそして更に進んだ哲学者は，世界は物質的なるアトムから成ると言ひ，精神的なる^(ママ) Nus (理) から成ると言ひ又一元からなると言ひ多元から成ると言ふ。

併し此等の哲学者にして見た処で，常識が有する独断を完全に征服してからの議論には成ってゐない。これは只問題を一步暗いところに押込んで仕舞ったに止まる。彼等も又，常識と同様に真認識の可能条件に関しても2つの要素を独断的に仮定してかかっているのである。併し此の2つの要素は我等一切の認識に関して如何にして必然的なものとして前提されなければならぬと，不可疑な確実性を持ったものであろうか。哲学はもともと根本的に懐疑する者に課せられた運命的な課題である。疑ひ得るすべてのものを疑つて，しかも尚疑ひ得ざるところに立脚して自然と人生とを真に不動なる基礎の上に建設せんとするところに哲学の最も深い要求が密んでゐる。故に哲学者は常識や科学の独断が不可疑とする其の根本仮定に対しても又疑ひの目を向けなければならない。——後略。——」

年号が大正から昭和に改元されたこの時，年の暮をひかえたあわただしい時期にもかかわらず，雪国の冬休みにはいった小学校の寒い一室で以上のような講義に耳をすましていた人々は，何を求めていたのだろうか。

以上が魚沼，八海両自由大学の素描である。大正期の後半に生まれ，昭和初期に消えた自由大学運動は，それが，純民間運動であったためか，従来ほとんどかえりみられることがなかった。数少ない労作もほとんど長野県における運動のみが取り扱われ，それ以外の地域を対象にした研究は少ない。自由大学運動を正當に評価し正しく位置づけるためには，各地に誕生した自由大学を掘り起こし総体としての姿を浮きぼりにすることがまず何よりも必要であらう。

その意味で運動のもっていた意味や限界を早急に判断することを避け，この

小論ではまずできるだけかくれていた資料紹介を中心として、事実を明らかにすることに努めた。自由大学運動の評価，とりわけ最近の大学解体や反大学，解放大学等の動きとの関連に相わたっての評価は，私の最も関心のあるところであるとはいえ後日にゆずりたい。

(註)

- (1) 1926 (大正15) 年11月10日，町制施行により現在は堀之内町。
- (2) 1954 (昭和29) 年5月1日，町村合併により，現在は，北魚沼郡小出町伊米ヶ崎。
- (3) 本社は長岡市坂ノ上町2丁目。昭和27年7月以降新潟日報社に吸収合併されその夕刊となった。
- (4) 当時の参加者林広策氏の記憶による。
- (5) 大正12年6月26日付手紙。京都市新町頭土田杏村より伊米ヶ崎村渡辺泰亮へ。
- (6) 「土田杏村とその時代」第7・8合併号(38～39ページ)
- (7) 報知新聞，大正12年11月4日～7日。
- (8) 大正12年11月9日付手紙。京都市新町頭土田杏村より伊米ヶ崎村渡辺泰亮へ。
- (9) 北越新報，大正12年12月18日付記事。「南魚沼郡伊米ヶ崎小学校に於て去る16日午前10時より高倉文学士を聘し八海自由大学の発会式を兼第1回講演会を開催せるが聴講者多数ありと。」
- (10) この草稿の日付は12月20日となっている。前出新聞記事との異同については未詳。
- (11) 大正13年3月10日付手紙。京都市新町頭土田杏村より伊米ヶ崎村渡辺泰亮へ。
- (12) 大正13年8月23日付手紙。京都市北白川由良哲次より伊米ヶ崎村渡辺泰亮へ。

- (13) 桑原氏のノートには，リカード 認識の対象概論 柳田謙太郎述 と記入されていたが，当時新潟師範に在職されていた柳田謙十郎氏が講師として来校されたことがわかり，したがってノートの「謙太郎」は「謙十郎」の誤りであり，また「リカード」は「リッカート」のまちがいであると柳田氏よりご教示をいただいた。